第35回茨城県私立幼稚園・認定こども園
教職員研究協議会
第６分科会

「子供理解のための
幼保小連携の在り方」

令和５（2023）年８月1日（火）

公益社団法人全国幼児教育研究協会茨城支部参与
（前常磐短期大学教授・副学長）福田　洋子

はじめに

（提案園発表について）

幼児期から児童期へ
子供の学びは連続していく

- 子供は、幼児期に遊びや生活を通して様々なことを学び、小学校に入学する。
- 学校種は変わるが子供の発達や学びは連続していく。
- だから、幼児期から児童期への子供の学びが連続・発展していくように、園と小学校の互いの教育を理解したうえで、それぞれのカリキュラムを見直し、円滑な接続を心がけなければならない。

まず、幼児教育、小学校教育の基本を押さえておく

- 幼稚園教育要領、保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領、小学校学習指導要領

- 幼稚園の場合・・・幼稚園教育の基本を押さえておく

- 人格形成の基礎を培うこと
- 環境を通して行う教育を基本とする
- 幼稚園教育の基本に関連して重視する事項
- 幼児期にふさわしい生活が展開されるようにすること
- 遊びを通しての総合的な指導が行われるようにすること
- 一人一人の発達の特性に応じた指導が行われるようにすること

幼児教育の充実のための基本的な視点

- ○幼児理解からの出発
- ○温かい関係を基盤に
- ○一人一人の特性に応じた教育

発達や学びの連続性を確保するための視点

- ○子供の発達や教育を長期的な視点で捉える
- ○幼児期から児童期への教育を理解する
- ○幼稚園・認定こども園・保育所等の教育を小学校教育へつなげる

社会が変化しても、変わらずに大切なこと

- 「幼児の心に寄り添う」

- 「幼児を理解することが全ての保育の出発点である」

- 「幼児を理解するとは一人一人の幼児と直接に触れ合いながら、幼児の言動や表情から、思いや考えなどを理解しかつ受け止め、その幼児のよさや可能性を理解しようとすることを指している」

- 「そのためには、安易に分かったと思い込んだり、この子はこうだと決め付けたりしてしまうのではなく、幼児と生活を共にしながら、表面に表れた行動から内面を推し量ってみることや、内面に沿っていこうとする姿勢が大切」

- ＊オタマジャクシ

- ・幼児の生活する姿から、その幼児の心の世界を推測してみる。
- ・推測したことを基に関わってみる
- ・関わりを通して幼児の反応から新しいことが推測される

- このような循環の中で徐々に幼児の行動の意味が見えてくる

- 教師（保育者）の関わり方との関係で幼児の行動や心の動きを理解しようとすることが、保育を見直し、その改善を図るために大切なこと。

- ＊「バイバイ」

- 幼児教育の充実のための基本的な視点

- ○幼児教育の基本は「環境を通して行う教育」

- 　幼児期にふさわしい生活をする中で幼児の遊びや生活といった直接的・具体的な体験を通して、人と関わる力や思考力、感性や表現力などを育み、 人間として、社会と関わる人として生きていくための基礎を培うことが大切

- 　環境に関わって幼児が主体性を十分に発揮し展開する生活を通して、望ましい方向に幼児の発達を促すようにすることが重要。

- **○幼児理解からの出発**

- 幼児期にふさわしい教育に必要なことは・・・一人一人の幼児に対する理解を深めること。

- 幼児期の保育とは、幼児が保育者や他の幼児たちとの生活の中で、周囲の環境と関わり、発達に必要な経験を**自ら得ていけるように援助する**営み。　幼児が何に興味をもっているのか、何を実現しようとしているのか、何を感じているのかなどを捉え続けていかなければならない。

- **○温かい関係を基盤に**

　　幼児期は、周囲の大人に対する信頼感に支えられて自分の世界を広げ、自立した生活に向かうようになる時期

　　能動性は、周囲の人に自分の存在や行動を**認められ、温かく見守られていると感じるときに発揮される**

- 　　幼児との間で信頼関係を築くこと

- **○一人一人の特性に応じた教育**
- 　　保育者が望ましいと思う活動を、一方的に幼児に行わせるだけの保育では、一人一人の発達を着実に促すことはできない。
- 　　幼児の発達する姿は一人一人異なっている
- 　　幼児の生活する姿から、今経験していることは何か、今必要な経験は何かを捉え、それに応じた援助をすることが大切

環境を通して行う教育の特質

- 環境を通して行う教育は、**環境の中に教育的価値を含ませながら**、幼児が**自ら興味や関心をもって**環境に取り組み、試行錯誤を経て、環境へのふさわしい関わり方を身に付けていくことを意図した教育である。

- 幼児との主体的な関わりを大切にした教育であるから、幼児の視点から見ると、自由感あふれる教育である。

- 環境を通して行う教育において、**幼児の関わりたいという意欲から発してこそ**、環境との深い関わりが成り立つ。幼児の**主体性**が何よりも大切にされなければならない。

環境を通して行う教育の特質

- 幼児が自分から興味をもって関われるように、遊具や用具、素材の種類、数量及び配置などを考えることが必要。このような環境の構成への取組により、幼児は積極性をもつようになり、充実感や満足感が得られるようになる。

- テーブル、整理棚、遊具、自然環境、教師間の協力体制など幼稚園全体の教育環境が、幼児にふさわしいものとなっているかどうかも検討されなければならない。

- 教師の幼児との関わりが重要。幼児期に幼児が学ぶべきことを学ぶことができるように援助していくこと。幼児の意欲を大事にするには、幼児の**遊びを大切にして、やってみたいと思えるようにする**とともに、試行錯誤を認め、**時間を掛けて**取り組めるようにすること。

- 教師は環境である。教師の動きや態度は、幼児の安心感の源。教師がモデルとして物的環境への関わりを示すことで、充実した環境との関わりが生まれる。

計画的な環境の構成と再構成

- 幼児が必要な体験を積み重ねていけるように、発達の道筋を見通して、教育的に価値のある環境を計画的に構成していかなければならない。

- 一人一人が関わっている活動の各々の展開を見通す。また学期、年間、入園から修了までの園生活、修了後の生活という長期的な視点に立って幼児一人一人の発達の道筋を見通して現在の活動を位置付け、幼児の経験の深まりを見通すことが大切。

- 常に活動に沿って環境を構成し直し、その状況で次の見通しや計画をもち、再構成し続ける。

幼児の主体的な活動のための環境の構成を

- 幼児が意欲をもって積極的に周囲の環境に関わっていくこと、すなわち主体的に活動を展開することが幼児期の教育の前提。

- 幼児が興味や関心をもち、思わず、関わりたくなるようなものや人、事柄があり、さらに、興味や関心が深まり、意欲が引き出され、意味のある体験をすることができるように適切に構成された環境の下で、幼児の**主体的な**活動が生じる。
- そして、その基礎には**安心感や安定感**がある。

- 幼児の興味や関心に即しながらも、その時期にその幼児にどのような育ちを期待したいか、そのために必要な経験は何かを考え、その経験が可能となるように環境を構成していくことが大切。

- **幼児の主体的な活動のための環境を構成することは、幼児を理解することにより可能となる。**

環境の構成における保育者の重要な役割

- **教師（保育者）自身が重要な環境**。
- 教師の存在（身の置き方や行動、言葉、心情、態度など）が幼児の行動や心情に大きな影響を与える。教師は自分も幼児にとって環境の非常に重要な一部となっていることを認識して環境の構成を考える必要がある。
- 主体的に関わるとは、幼児なりに思いや願いを持ち続け、関わっていくこと。
- 教師は幼児の活動の流れや心の動きに即して、常に適切なものとなるように、**環境を再構成**していく。

豊かな体験が得られる環境の構成のために

- 幼稚園教育（保育所、こども園）のねらいを達成していくためには、幼児が活動に**没頭し、遊び、充実感や満足感を味わっていく**ことが重視されなければならない。

- 活動の**過程**が重要。活動の結果どれだけのことができるようになったか、何ができたかだけを捉えてはならない。活動の過程が意欲や態度を育み、生きる力の基礎を培っていく。

- 教師（保育者）は**幼児が本当にやりたいと思い、専念できる活動を見つけていくこと**ができるように、つまり、いろいろあり得る活動の中から興味や関心のある活動を選び取っていくことができるように、しかも、その活動の中で発達にとって大切な体験が豊かに得られるように環境を構成することが必要。

- 教師（保育者）は、新しい事物を出したり、関わりを増やしたりしていくだけではなく、不要なものや関わりを整理し、取り去ったり、しばらくはそのままにして見守ったりしていくことも必要。

- ＊不足する環境も大切

幼児と活動を共にしながら環境の構成を

- 幼児の活動が精選される環境を構成するには、幼児の興味や関心の在り方、環境への関わり方、発達の実情などを理解することが前提。

- その上で幼児が興味や関心のある活動に**じっくり取り組む**ことができるだけの**時間、空間、遊具**などの確保が重要。

- さらに、教師（保育者）自身が活動に参加するなど、興味や関心を共有して活動への取組を深める指導が重要になる。

- 活動を充実することは、幼児が活動に**没頭する中で思考を巡らし、心を動かしながら豊かな体験**をしていくことである。そして、教師（保育者）は、このような活動がより豊かに行われるように、**幼児と活動を共にしながら**環境の構成を工夫する必要がある。

保育の展開と記録

- 記録の役割の重要性
- ・一人一人の理解と記録
- ・指導の過程と記録

幼児理解に基づく記録の重要性

- 日々の記録やエピソードなどから幼児理解を深めたり、保育者自身の思いや動きに気付いたりすることは、
- **自分自身の保育を見直し改善**することにつながる
- 複数の教職員で日々の記録等を共有しながら多面的に幼児を捉えることにより、
- **保育の質の向上**にもつながっていく
- **＊ゴミ箱の中、靴箱の奥にも記録がある**

○保育における評価とは

- 幼児期にふさわしい教育を進めるためには、保育における評価とは何かを明確に捉えることが必要

- 「評価は**幼児の発達の理解と教師の指導の改善**という両面から行うことが大切である」

- 「指導の過程を振り返りながら幼児の理解を進め、幼児一人一人の**よさや可能性**などを把握し、指導の改善に生かすようにすること。その際、**他の幼児との比較や一定の基準に対する達成度についての評定によって捉えるものではない**ことに留意すること」（幼稚園教育要領）

- 「保育の中で幼児の姿がどのように変容しているかを捉えながら、そのような姿が生み出されてきた様々な状況について適切かどうかを検討して、保育をよりよいものに改善するための手掛かりを求めることが評価なのです。」

- 幼稚園の保育は一般に次のようなプロセスで進められる

- ①幼児の姿から、ねらいと内容を設定する
- ②ねらいと内容に基づいて環境を構成する
- ③幼児が環境に関わって活動を展開する
- ④活動を通して幼児が発達に必要な経験を得ていくような適切な援助を行う
- ↓
- 幼児の活動と経験を予想した指導計画（計画は一つの仮説）
- ↓
- 実際に幼児が生活する姿から発達の全体的な状況、よさや可能性などを捉え、それに照らしてみて
- ・**教師の関わり方は適切であったか**
- ・**環境の構成はふさわしいものであったか**
- ・**あらかじめ教師が設定した指導の具体的なねらいや内容は妥当なものであったか**
- などについて、振り返り評価をすることが必要

いつ評価するのか

- 評価は常にそのための時間を取って行わなければならないというわけではない

- 日常的な素朴な振り返りも保育の改善に役立ちうるもの
- 例えば、一日の保育の後に、教師が今日の流れを振り返って書き記すとき
- あの幼児はなぜあのような姿を見せたのだろうか
- あの幼児にはこのようなよい面があったと気付いたり、
- 教師としてこのようなことをすればよかったのにと振り返ったり
- 幼児の力を更に発揮させるには環境をどうしたらよいかと考えたり
-

- このような誰でもごく普通に行っていることが評価である
- 長い目で**「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を活用し**
- 幼児の発達の姿と教師の関わり方などについて見落としている点はないか、
- 画一的な捉えになっていないかなどを確認することは
- → 次の保育への手掛かりを見出すことにもつながる

小学校教育との接続に当たっての留意事項

（幼稚園教育要領　第１章 総則　第３ 教育課程の役割と編成等
５小学校教育との接続に当たっての留意事項）

- ５　小学校教育との接続に当たっての留意事項

- (1)　幼稚園においては、幼稚園教育が小学校以降の生活や学習の基盤の育成につながることに配慮し、幼児期にふさわしい生活を通して、創造的な思考や主体的な生活態度などの基礎を培うようにするものとする。

- ＊下線は、改訂による新しい部分

小学校教育との接続に当たっての留意事項

- (2)　幼稚園教育において育まれた資質・能力を踏まえ、小学校教育が円滑に行われるよう、小学校の教師との意見交換や合同の研究の機会などを設け、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を共有するなど連携を図り、幼稚園教育と小学校教育との円滑な接続を図るよう努めるものとする。

- ＊下線は、改訂による新しい部分

- 幼児教育では、小学校以降の生活や学習の基礎を培うのですが、
- しかし、そこでは、幼児期にふさわしい生活と教育の在り方を通して進めるのです。

- さらに、小学校教育をやりやすくするため、細かいマナーやスキルをしつけるということより、もっと資質・能力に関わる創造的な思考や主体的な態度を養うのです。

（「ここがポイント！３法令ガイドブック」無藤隆　から　）

- 幼児期の教育は、義務教育およびその後の教育の基礎を培うものであるが、それは、小学校教育の内容を先取りして幼児期の子供に教え込むことではない。

- 小学校教育を理解し、見通したうえで、幼児期にふさわしい生活を展開しながら遊びを通して生きる力の基礎を育むことである。

- 特に、子供なりに好奇心や探究心をもち、問題を見出したり解決したりする力を育てること、豊かな感性を発揮したりする機会を提供し、それらを伸ばしていくことが大切になる。

- 子供は遊びを通して様々なことを学んでいる。
- 遊びながら・・・・
- 　　友達と目的を共有し、
- 　　目的に向かって試行錯誤したり
- 　　問題が生じると友達と話し合い、自分たちなりの方法で解決したり

- これらの学びは目に見えにくいものが多いが、生きる力の基礎として子供の内面にため込まれていく。
- 子供が**主体的に遊び込むことを通して得られる力こそが、小学校以降の生活や学習の基盤となる**のである。

幼児教育と小学校教育との連携・接続のために

- １　交流、合同研修・研究
- ○　教師（保育者）同士・・・・意見交換、教師・保育者の経験の交換、研修・研究、授業・保育参観等を合同で
- ○　子供同士（乳幼児と児童・生徒）、特別支援学校の子供達・・・・交流
- ○　幼児教育施設の保護者と小学校の保護者・・・・交流・意見交換等

- ２　接続
- ○　カリキュラムとして教育課程や指導計画を連続的なものとすること
- もとより、２つの教育は仕組みに違いがあるので、その違いは大事にしつつ、

特に**「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」が育つ様子を一人一人の子供に即して共有し**、スタートカリキュラムやその先の教育へと発展させながら、教科等の教育へと進める。

- アプローチカリキュラム
- スタートカリキュラム
- 幼保小の架け橋プログラム

幼保小の架け橋プログラムとは

（文部科学省）

- 幼児教育と小学校教育の双方から橋をかける
- 　小学校教育の前倒しではない
- 　５歳児と小学校１年生の２年間を「架け橋期」と呼ぶ

- 各地域や施設が創意工夫を生かして取り組む

- 現行の要領・指針の内容を丁寧にしっかり取り組む

- 【架け橋プログラムのねらい】（文部科学省）
- ○　幼児期から児童期の発達を見通しつつ、５歳児のカリキュラムと小学校１年生のカリキュラムを一体的に捉え、地域の幼児教育と小学校教育の関係者が連携して、カリキュラム・教育方法の充実・改善にあたることを推進
- ○　３要領・指針、特に「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の正しい理解を促し、教育方法の改善に生かしていくことができる手立てを普及
- ○　架け橋期に園の先生が行っている環境の構成や子供への関わり方に関する工夫を見える化し、家庭や地域にも普及
- ○　幼児期・架け橋期の教育の質保障のための枠組みを構築し、データに基づくカリキュラム・教育方法の改善を促進

（参考） 幼児期の終わりまでに育ってほしい姿

(1)健康な心と体

園生活の中で、充実感をもって自分のやりたいことに向かって心と体を十分に働かせ、見通しをもって行動し、自ら健康で安全な生活をつくり出すようになる。

(2)自立心

身近な環境に主体的に関わり様々な活動を楽しむ中で、しなければならないことを自覚し、自分の力で行うために考えたり、工夫したりしながら、諦めずにやり遂げることで達成感を味わい、自信をもって行動するようになる。

(3) 協同性

友達と関わる中で、互いの思いや考えなどを共有し、共通の目的の実現に向けて、考えたり、工夫したり、協力したりし、充実感をもってやり遂げるようになる。

(4) 道徳性・規範意識の芽生え

友達と様々な体験を重ねる中で、してよいことや悪いことが分かり、自分の行動を振り返ったり 、友達の気持ちに共感したりし、相手の立場に立って行動するようになる。また、きまりを守る必要性が分かり、自分の気持ちを調整し、友達と折り合いを付けながら、きまりをつくったり、守ったりするようになる。

(5) 社会生活との関わり

家族を大切にしようとする気持ちをもつとともに、地域の身近な人と触れ合う中で、人との様々な関わり方に気付き、相手の気持ちを考えて関わり、自分が役に立つ喜びを感じ、地域に親しみをもつようになる。また、園内外の様々な環境に関わる中で、遊びや生活に必要な情報を取り入れ、情報に基づき判断したり、情報を伝え合ったり活用したりするなど、情報を役立てながら活動するようになるとともに、公共の施設を大切に利用するなどして、社会とのつながりなどを意識するようになる。

（参考） 幼児期の終わりまでに育ってほしい姿

(6)思考力の芽生え

身近な事象に積極的に関わる中で、物の性質や仕組みなどを感じ取ったり、気付いたりし、考えたり、予想したり、工夫したりするなど、多様な関わりを楽しむようになる。また、友達の様々な考えに触れる中で、自分と異なる考えがあることに気付き、自ら判断したり、考え直したりするなど、新しい考えを生み出す喜びを味わいながら、自分の考えをよりよいものにするようになる。

(7)自然との関わり・生命尊重

自然に触れて感動する体験を通して、自然の変化などを感じ取り、好奇心や探究心をもって考え言葉などで表現しながら、身近な事象への関心が高まるとともに、自然への愛情や畏敬の念をもつようになる。また、身近な動植物に心を動かされる中で、生命の不思議さや尊さに気付き、身近な動植物への接し方を考え、命あるものとしていたわり、大切にする気持ちをもって関わるようになる。

(8)数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚

遊びや生活の中で、数量や図形、標識や文字などに親しむ体験を重ねたり、標識や文字の役割に気付いたりし、自らの必要感に基づきこれらを活用し、興味や関心、感覚をもつようになる。

(9)言葉による伝え合い

先生や友達と心を通わせる中で、絵本や物語などに親しみながら、豊かな言葉や表現を身に付け、経験したことや考えたことなどを言葉で伝えたり、相手の話を注意して聞いたりし、言葉による伝え合いを楽しむようになる。

(10) 豊かな感性と表現

心を動かす出来事などに触れ感性を働かせる中で、様々な素材の特徴や表現の仕方などに気付き、感じたことや考えたことを自分で表現したり、友達同士で表現する過程を楽しんだりし、表現する喜びを味わい、意欲をもつようになる。

1．「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の捉え方の例

自らの興味や関心に応じて、思うがままに環境と関わる中で、様々な体験を積み重ねていく。その具体的な姿について「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を手掛かりに捉える。
活動の中での具体的な幼児の姿を通して、幼保小の先生方が話し合うことが大切である。ここでは、幼児が自分達で考えたお店屋さんごっこ（クレープ屋さんの場合）を例に、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を捉えてみる。

健康な心と体

明日、クレープ屋さんをやりたいと思って、お店に必要な小道具を考えて準備する

自立心

自分達で考えたお店作りが、自分達の力で実現できた達成感、友達が喜ぶ充実感を味わう

協同性

実現したいお店のイメージを友達と共有し、役割分担したり協力したりしながらごっこ遊びを展開する

道徳性・規範意識の芽生え

やりたいことが友達と異なる時には、折り合いをつけながらきまりをつくる

社会生活との関わり

楽しかった地域のお祭りの経験を友達と共有し、かっこよかったクレープ屋さんを再現してみたいと考える

興味や関心に応じて遊びに没頭する
10の姿が絡み合って現れてくる

楽しい

一緒にやりたい

本物らしくしたい

〔今後体験してほしい〕
共通の目的の実現に向けて協力したり、時には互いの思いがぶつかりあう中で、相手の立場になって考えたり、互いが納得できる代案を考えたりしてほしい。

〔過去の体験〕
絵をかいた時に、カラフルに色を塗って楽しんでいたので、また、カラフルにしたいと思ったのかな。

思考力の芽生え

ふさわしい材料を考えてクレープに見立て、より本物らしい見え方を試行錯誤する

自然への関わり・生命尊重

クレープを持って園庭や公園へピクニックに出かけ、花を愛でたり風の気持ちよさを感じたりする

数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚

生活の中にある文字や数字を使ってみると、お店が本物らしくなり楽しくなることを知る

言葉による伝え合い

興味を持った出店について友達と意見交換し、自分の思いが伝わる表現を工夫したりしながら話し合う

豊かな感性と表現

クレープ生地に具材を置くときに、カラフルできれいにみえるようにするなど、自分なりの表現を楽しむ

保幼小の相互理解のために
授業参観や保育参観をする際の視点

保育参観の中で見取る

- 幼児の目の高さになって
- 遊びを壊さないようにしながら
- 幼児のつぶやきを聞き取れる距離まで近づいて
- 目を合わせないようにしていると、幼児は遊び続けることが多い

- （園庭などでは、立って全体を見ることも）

保育参観の中で見取る

- 幼児が遊ぶ姿から
- 　遊びが大切
- 　幼児の主体性が重要
- 　幼児の思い、興味・関心がどこにあるのかを見取るよう努力する
- 　この遊びを通して何が育っているか、何を学んでいるかを考える

- 教師（保育者）と幼児一人一人、あるいは集団への関わり方を見取る

- 幼児同士が関わる様子を見取る

- 保護者との関わり、降園時の様子を

保育参観の中で見取る

- 環境としての教師（保育者）
- 温かさ
- 保育室の雰囲気
- 時間の使い方
- 幼児一人一人に応じて
- 例えば、片付け場面

- 物的環境
- ・安全（毎朝の安全点検、月に１度の安全点検、その他）
- ・自然物、花はどこに
- ・清潔感が大切
- ・幼児の好きな場所

保育参観の中で見取ったことから話し合う

- 指導案に事前に目を通しておき、
- 　　素晴らしい取組み
- 　　課題だと感じるところ
- 　　「ねらい」を取り上げて

- 保育参観の中で気付いたこと

これまでの経験、体験、実践の中から伝えたいことを

- ○　保育者と小学校教諭がざっくばらんに話してみる
- 　素朴な疑問点、日頃思っていること、知りたいと思っていること

- ○　Y小学校の実践事例から
- ・教頭が文書を保育園に持参するなどの関わりから
- ・「教頭先生、幼小連携やりましょう」　教員の主体性から
- ・１年生４～５人が保育園で自作の紙芝居
- ・幼児教育施設、小学校の現場に立ってはじめて分かること

- ○　幼稚園、小学校、中学校、特別支援学校が一堂に会して、またグループに分かれて意見交換をした実践事例から

- 出来ることから一歩ずつ
- 子供たちのために

引用・参考

- 文部科学省　「幼稚園教育要領解説」平成３０年３月
- 内閣府・文部科学省・厚生労働省「幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説」 平成３０年３月
- 厚生労働省「保育所保育指針解説」平成３０年３月
- 神長美津子・津金美智子・河合優子・塩谷香　編著　「教育課程論」光生館　2018（平成30）年
- 無藤隆・汐見稔幸・砂上史子「ここがポイント！３法令ガイドブック」（株）フレーベル、平成２９年５月
- 北野幸子・山下文一・柿沼芳枝編著「保育者論ー子どもの未来を拓く保育者の役割ー」光生館　2019年3月（（第9章　リーダーシップとチーム学校運営　福田担当）
- 井上孝之・山崎敦子編「子どもと共に学びあう　演習・保育内容総論」第２版　みらい　2018年12月 (第５章３，４，５，６節（家庭・地域・小学校との連携をふまえた保育）　福田担当）

引用・参考

- 文部科学省　「幼児理解に基づいた評価」平成31年3月　（令和元年5月30日）
- 文部科学省　「幼保小の架け橋プログラムの実施に向けての手引き（初版）」令和４年３月31日
- 文部科学省　「幼保小の架け橋プログラムの実施に向けての手引きの参考資料（初版）」令和４年
- 文部科学省　初等中等教育局幼児教育課　横山真貴子幼児教育調査官　「幼児教育の質向上と幼保小の架け橋プログラム」　日本乳幼児教育・保育者養成　第３回研究大会　2022年12月11日
- 無藤隆,山下文一,他「発達　特集　保幼小の連携　架け橋をめざして」ミネルヴァ書房　2023年２月10日